

湘北インターンシップの発展に伴う インターンシップセンターの役割の変化

長谷川文代

Change in the Function of the Internship Center along with the continual development of Shohoku Internship Program

Fumiyo HASEGAWA

Since the first introduction of the Shohoku Internship Program in 1993, the program has been developing constantly. The contents have been diversified, and the number of students' participation in the program has been increasing steadily.

However, such development has raised various urgent problems to be solved immediately for further development. Consequently, The Internship Center has been changing its function to work them out.

This is the report on the present situation of Shohoku Internship Program and the Center's activity.

I. はじめに

湘北短期大学のカリキュラムにインターンシップが初めて取り入れられたのは、1993年である。商経学科（現総合ビジネス学科）の一科目としてスタートした。その後、科目も増えて実施方法も多様化し、受講生数も増え続けて、着実に発展してきている。

しかし、そのような発展に伴い、導入当事には全く問題にならなかったことが、今日では大きな課題となって次々と浮上してきた。それらを改善するために、インターンシップセンターは、近年その役割を変化させてきている。

本学におけるインターンシップ導入14年後の現状とセンターの活動について報告する。

II. 湘北インターンシップの歴史と現状

1. 歴史

今から14年前の1993年、商経学科（現総合ビジネス学科）の田中助教授（当時）が、秘書実務の授業方法研究の目的で訪米した際にインターンシップ制度の存在を知り、学科の一科目として導入しようと試みた。反対の声もある中、独力で受入企業を開拓し、「短期」（1～2週間）のインターンシップをスタートさせた。初めは、トライアルとして単位なしのプログラムであったが、学生の評判も大変よく、また効果も大きかったことから、同学科の正規授業科目として取り入れられることとなった。（注1）

やがて文部省（当時）などでインターンシップ推進の動きがあり、本学でも、現在のリベラルアーツセンター的役割を果たしていた当時の基礎教養センター（現インターンシップセンター）が中

心となって、全学的導入の検討を初めた。当時本学の学生を採用して下さっていた全企業にインターンシップ受入に関するアンケートを実施することによって受入先を確保し、1997年にトライアルとして、まずは生活科学科（現生活プロデュース学科）に「短期」を導入した。これも、大変効果的だったため、翌年正規の授業となり、学校として本格的に取り組んでいくこととなった。（注2）更に1998年には、これもセンターの主導により、ソニー株式会社およびその関連会社を実習先とし、学科を越えて実施する「長期」（6週間）のインタ

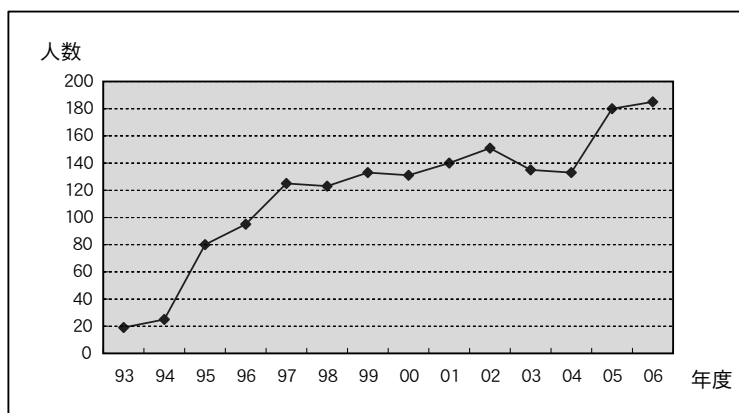
ーンシップが開始された。

その後は、各学科で独自にインターンシップ科目・プログラムが導入されていった。1999年には商経学科（当時）で留学時のインターンシップが、その翌年には、電子情報学科（現情報メディア学科）で技術系の「長期」がスタートした。更に2005年には「長期2期」、「インタバル」という、新しいシステムのインターンシップが、それぞれ総合ビジネス学科、および生活プロデュース学科で開始され、2006年には、情報メディア学科にメディア系の「長期」が新たに導入された。

(表1) 湘北インターンシップの歴史

1993	商経学科で「短期」導入
:	
1997	生活科学科で「短期」導入
1998	3学科で「長期」導入
:	
2000	商経学科で留学時のインターンシップ「短期」導入
2001	電子情報学科で「長期(技術系)」導入
2002	SHOHO活動(学内インターンシップ)開始
2003	文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択
:	
	総合ビジネス学科で「長期」導入
2005	生活プロデュース学科で「短期」を2種類に分ける
	生活プロデュース学科で「インタバル」導入
2006	情報メディア学科で「長期(Web系)」導入

(表2) 湘北インターンシップ（学外）受講生数



また、その間、2002年には、学内のインターンシップとしてSHOHO活動が開始され、2003年には本学の学内外インターンシップに対する取組が、文部科学省の「特色ある大学支援プログラム」に認定された。

2. 受講生数の増加

このように科目が充実し、更に高等学校で「インターンシップ」の知名度が高まり、その効果が浸透するにつれ、表2の通り受講生数も増加してきている。湘北短期大学への志望理由に、インターンシップ制度を挙げる高校生も多い。19名の受

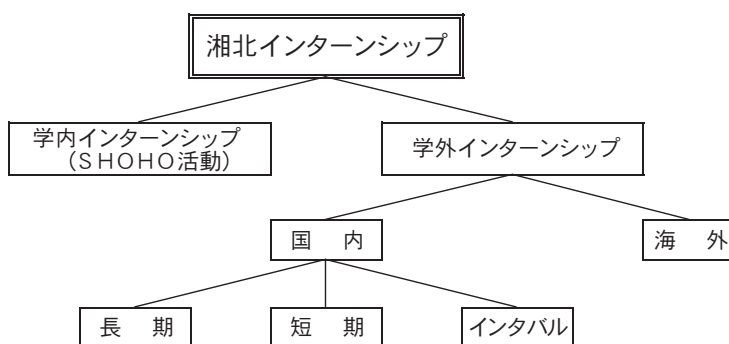
講生でスタートした本学のインターンシップは、今年度、そのおよそ10倍となる185名の学生が受講した。

3. 2006年度のインターンシップ

このような経過をたどり、2006年度、国内での企業に於けるインターンシップは、下図の通り大きく分けて「長期」「短期」「インタバル」という3種類が行われた。

また、科目・プログラム数では、下表の通り3学科で計10のインターンシップが実施されている。

(図1) 湘北インターンシップの種類



(表3) 湘北短期大学における2006年度実施のインターンシップ

学 科	科目・プログラム名	時 期	日 数	単 位
総合ビジネス学科	企業実習長期	1年次春期休暇	3~4wks × 2	2
	企業実習短期	"	1~2wks	1
	企業実習短期	1年次後期留学時	1wks	1
生活プロデュース学科	ビジネスインターンシップ長期	1年次春期休暇	6wks	4
	ビジネスインターンシップ短期A	"	1~2wks	2
	ビジネスインターンシップ短期B	"	1~2wks	2
	キャリア演習 I	1年次後期	6~7days	2
	キャリア演習 II	2年次前期	6~7days	2
情報メディア学科	ビジネスインターンシップ長期	1年次春期休暇	6wks	なし
	長期インターンシップ	"	5w k s	なし

III. 発展に伴う課題

本学でインターンシップが導入されて以来、かなりの期間、実施方法などはすべて科目の担当教員に一任されてきた。当初は、それで何の問題もなかったが、最近、科目や受講生の増加に伴って、次のような問題が生じてきた。

1. データ管理の不備

以前は、インターンシップに関する過去のデータは、担当教員が他の通常の担当科目と同様に、研究室でそれぞれ管理していた。よって、インターンシップに関する学校全体の数字が必要になると、各担当者に問い合わせたり、科目ごとの報告書をつき合わせたりするなどしなければ結果が得られないという状況であった。また、担当者が変われば、データが失われてしまう可能性もあった。

2. 情報の混乱

1) 企業における混乱

以前は、科目ごとに受入先を分けるという暗黙の了解があり、一つの企業に対して複数の科目を依頼することのないように、各担当者が新規受入先を開拓する努力を続けてきていた。しかし、科目の増加に伴い、経緯は様々であるが結果として、一企業に対し、複数の学科から複数のシステムのインターンシップを依頼するというケースが増えてきた。例えば、昨年度は、ある企業に、4科目の種類の異なるインターンシップを依頼することになってしまった。これまで通りの実施方法では、各担当教員がそれぞれ個別にその企業の受入担当者に依頼し、各種書類なども、形式も時期もばらばらに送付することになる。当然受入企業においては情報の混乱・錯綜がおこる状況となった。

また、各科目担当者が受入先を次々と開拓していった結果、本学のインターンシップに対する企

業の理解度や受入態勢に、ばらつきも生じてきた。

2) 学内における混乱

あまりに多くのインターンシップがさまざまな時期にさまざまなやり方で実施されているため、学内でも、科目担当者以外には、どのようなインターンシップがどのように実施されているのか、理解されていない状態になってきた。トップや関係部署には、担当者よりそれぞれ報告書が提出されていたが、その時期も形式もまちまちであったため、湘北インターンシップの全体像が理解されにくい状況となってきた。

3. 学生の多様化に伴う事前学習の創意工夫の必要

本学でインターンシップがスタートした当初は、履修者は非常に真面目で、積極的な学生が大多数であった。徐々にその層が広がってきて、学校での生活態度はあまり好ましくはない(遅刻が多い、締切を守らないなど)が、就職・仕事に対しては前向きで、外では高い評価を得るような学生も受講するようになっていった。しかし最近では、次第にもっと幅広い学生、すなわち、知識面・マナー面に加えて精神面でも不安要素の大きい学生も、履修を希望するようになってきた。インターンシップが高校でもあまりに当たり前の言葉となってきたために、「受講しないと、就職できない」と思い込んで「取り敢えず受けようかな」という学生、あるいは「皆が行くから行こうかな」という学生が増加してきているのではないかと思われる。その結果、職業観も目的意識も持たないままに実習に行く学生も増えてきた。もちろん、それでも実習をきっかけに大きく伸びる学生もいるが、現場の大変さに耐え切れず、かえって挫折してしまうというケースが出てきた。受講生の層が広がること自体は、よいことであるが、これまで以上

に、事前学習の内容を工夫することが必要となってきた。

IV. センターの役割の変化

1. 初期の役割

上述の通り、1997年～1998年のインターンシップ全学的導入に関しては、学科の枠を越えて基礎教養センター（当時）が中心的な役割を果たした。しかし、それ以降はすべて、各学科において、独自に導入されてきている。

各インターンシップ科目・プログラムの実際の運営に関しては、他の通常の授業科目と同様に、学科独自の状況を尊重し、センター主導で導入したのも含めてすべて、科目担当教員に一任されてきた。センターでの調整等は一切せず、また担当者同士も組織的には情報交換や相談をすることもなく、担当者は、受入企業の開拓・選択から実習方法やその内容、事前事後学習にいたるまですべて、その学科の特徴を活かし、学生の気質・ニーズに応じたやり方で実施していた。また学生に対する説明会や、企業への受入依頼などのスケジュールも、科目毎に独自に設定され、学校としての統一は全くしていなかった。

当初はそのような状況で何の問題もなく、センターは、しばらくの期間、予算管理と実施報告の場の提供、およびとりまとめの役割のみを担ってきた。

2. 近年のセンターの役割

しかし、前述の通り、インターンシップの発展に伴い、様々な問題が生じてきた。そこで、数年前よりそれらの課題を解決することがインターンシップセンターの役割であると捉え、より効率のよい、効果的な実施方法を目指して、学科を超えての調整に着手し始めた。学科の自治や担当教員

の意思は妨げることをないように配慮しながら、できるところから様々な一本化・統一化に向けて活動することとなった。

1) データの一本化

インターンシップのデータベースを構築し、過去のおよそ1400人分のデータを入力して、担当者間での情報の共有化を可能にした。また、それをWeb化して、情報の一部を担当教員以外の教職員も参照できるようにし、さらにその一部を、学生にも公開した。

2) 情報の一本化・統一化

できるところから、たとえ些細なことでもすぐ手をつけられるところから、一本化・統一化を図り、学内外での情報の混乱を減らす努力をし続けている。また、2005年には、本学のインターンシップに関する情報（その目的や本学の取組姿勢など）を受入先に十分理解していただき、共通認識を持っていただくために「インターンシップ懇談会」を実施した。（注3）

3) 学科を越えた事前事後学習

事前学習として、オフィスワーク関連の知識やマナーの習得、PC技術向上などはすでに科目ごとに実施している。しかし、それに加えて精神面の強化が必要であると思われた。多様化している1年生の意欲を高め、しっかりとした目標をもって実習に望めるようするために、何が有効な手段かを考えた結果、インターンシップを体験してきた2年生の協力を得ることを考えた。担当するインターンシップ科目の最初のガイダンス時、教員の説明に加えて、2年生にも話をしてもらおうと、その後提出される受講申込みのレポートに、「先輩が〇〇と言っていたので申し込んだ」「先輩の〇〇という言葉に興味をもった」という文がよく書かれ

ているからである。決して喜んでばかりはいられないことではあるが、学生は、教員の言葉よりも、年の近い先輩の話を非常によく聴く傾向にあることを活かしたいと思った。

そこで、初めての試みとして、下記の通り「2年生によるインターンシップ体験報告会」を、インターンシップセンター主催で実施した。

日時：2006年12月6日（水） 16:40～18:10

場所：611教室

対象：2006年度各インターンシップ受講生
全員（1年生）

プレゼンター：前年度各インターンシップ
体験者代表8名（2年生）

目的：①1年生の不安を解消し、企業へ実習に
行く心構えを持たせる

②1年生に、2年生のプレゼンテーショ
ンを見せ、向上心をもたせる

③2年生のプレゼンテーション力を高め
る（事後学習の一つとして）

2年生の発表者には、インターンシップでの具体的な仕事内容ではなく、「その体験で感じたこと、気付いたこと」「その後の学生生活や就職活動に生かされたこと、役立ったこと」「1年生に対するメッセージ」を中心に、パワーポイントを使用してプレゼンテーションをするよう依頼した。PP作成に不慣れな学生には、研修も実施した。しかし、話の構成やパワーポイントの内容に関しては各自に任せ、敢えて指導は行わなかった。また、話の内容だけでなく、2年生の発表態度なども1年生にとっては大きな刺激になると考え、事前に予行を行ってできるだけスムーズな運営を心がけ、また司会進行も2年生に任せた。

V. 最近のセンター活動の成果と課題

上述のような活動の結果、次のような成果が得られた。

1. DB構築およびWeb化

DBを構築し、過去の膨大なデータを入力して、更にWeb化したことにより、以下の成果が得られた。

1) DB

- * 科目毎だけではなく、学校全体としてのデータもたやすく管理できるようになった。
- * 担当者が変わっても、データが失われる恐れもなくなり、引継ぎもしやすくなった。

2) Web化

- * 担当教員以外の教職員も、インターンシップに関する情報の閲覧が可能となった。
- * 学生にも、企業に関する情報、実習に行った先輩の感想やコメントなどが公開されたことにより、受講の決定、実習希望先の選定などに役立てられるようになった。

DBは、かなり完成に近づいてきたが、Web画面はまだデザインや内容の検討が必要である。現在、利用者にアンケートを依頼しており、その結果に基づいて改善をしていく。

2. 情報の一本化・統一化

情報の発信方法、書類の形式等を一本化・統一化したことにより、学内外における情報の混乱が、多少は改善されてきている。ただ、まだまだ不十分であり、次年度も更に、進めていくことが必要である。

今後は、この作業を更に効率よく進めるために、センター委員以外のインターンシップ担当教員からも定期的に情報提供を受け、また担当者間の連絡会議を適宜開催することを検討している。

3. 2年生によるインターンシップ体験報告会

この会に参加した1年生にアンケートをとったが、その集計結果の内容は予想以上のものであった。(資料1, 2参照)

また、プレゼンターの方の2年生も、「初めは嫌で、できることなら断りたかったが、終わったときの充実感は大きかった」「依頼されたときには何で私が、と思ったが、緊張しながらもやり遂げられて、自分が一回り成長したと感じる」「依頼されてうれしかったし、自分にとってよい機会だと思った」などと、全員が異口同音に前向きな感想を述べていた。期待していた通りの成果が得られたので、指摘された問題点を改善し、次年度から定期的に続けていく予定である。

VI. 2007年度以降の課題

2007年度は、今年度の活動を反省し、また、学生の変化を考慮しつつ、以下のことに力をいれて、活動していく。

1. 一層の一本化・統一化

次年度は、履歴書のフォーム、報告書のフォーム・内容・提出時期、等々の統一化を予定している。また、これまで学科により全く異なっていた科目名も、次年度からかなり統一されることがすでに決定している。その他にもまだまだできることがあるので、小まめに実施していく。

2. 事前事後学習の充実

1) 事前学習

インターンシップ受講生だけでなく、学生全体に關して言えることであるが、近年、ますます様々な面での基礎力に欠ける学生が目立ち、以下のような傾向が一層顕著になってきているように思える。

- ・ これまでは当然知っていると思われていたような常識を知らない
- ・ 学びに対する意欲がない
- ・ 「知らない」「できない」ことを、「恥ずかしい」「悔しい」と思わない
- ・ 自分から行動しようとしにくい
- ・ 物事を考えない

そのような受講希望学生に対しては、実習に送り出す前に、まずは学ぶことに対する興味、自分を向上させようという意欲をもたせ、更に仕事に取り組む心構えや就労観を育成していかなくてはならない。層が広がった受講生全員が、途中で挫折することなくインターンシップを体験して大きく成長し、あるいは少なくとも伸びるきっかけを得て学校に戻ってこられるように、これまで以上により肌理の細かい、一人ひとりの顔を見ての事前教育、特に、精神面の成長を促していくような事前学習の方法を模索していく。

2) 事後学習

これまで事後学習としては、個人面談や報告会など、学生が実習体験をふりかえり、参加者同士情報交換をする機会を設けることによって、インターンシップで得たものを、学生がその後の学習や就職活動に生かせるようにしてきた。しかし、それにとどまらず、企業での体験を長い目で見たキャリア形成にも生かせるような教育が、その後卒業を迎えるまで継続して与えられれば、その効果はもっと高まっていく。インターンシップに限らず、様々な場面で学んだことを体系的にとらえ、更に次のステップに上がって、Plan-Do-Seeを繰

り返していられるような、キャリア教育という観点からの事後学習の実施が望まれる。

また、担当教員だけが頑張るのではなく、2年生の力を1年生の事前学習に生かすことによって、2年生の事後学習にするとすることも計画している。前述の「体験報告会」もその一つである。今年度のインターンシップが終了した時点で、各科目から若干名のインターンシップ学生委員（仮名）を選出し、様々な場面で活動してもらいながら、企画、段取り、コミュニケーション、リーダーシップ、気働き、文章作成、プレゼンテーションなど、社会で求められる力を向上させようと計画している。

3. 情報公開・広報活動の充実

インターンシップ関連記事の学校ホームページ掲載、高大連携活動の活用などにより、学内外に対し、本学インターンシップの情報を積極的に知らせる努力をしていくことも必要であると思う。Web化された情報内容や画面デザインも、より利用しやすいものに変更していく。

Ⅶ. おわりに

どの科目に関しても言えることであるが、インターンシップの実施方法も、時代の流れを見極めながら、その時その時に即したよりよいやり方を求めて常に改善を続けていかななくてはならない。ただ、そのための細かい工夫や努力はもちろん大切であるが、それ以上にもう少し大きな課題もあると思う。

その一つは、担当教員の負担軽減である。本学のインターンシップは、幸いなことに学長や事務局の多大な理解・協力も得られ、順調に発展している。しかし、スタート時から現在にいたるまで、実際の運営は、偏に担当者の情熱によっている部

分が大きく、通常の授業運営に比べて、一人の受講生に対して要する時間・エネルギーが非常に多い、効率のよくない科目となっている。今後、安定して更に発展させていくためには、センターが各担当教員の事務的な仕事の量をできるだけ軽減し、その力をできるだけ創造的な仕事に向けていられるようにしていく役割を果たすことが肝要である。専任の事務担当職員を配置し、組織として実習先の安定供給を図るなど、個人の努力だけに頼らない取り組みが必要であると思う。

もう一つは、キャリア教育としての全学的な取り組みである。現在は、インターンシップはインターンシップ、キャリアセミナーはキャリアセミナー、就職ガイダンスは就職ガイダンス、とそれぞれの担当部署・担当者により非常に熱心に行われているが、キャリア教育という大きな観点から、お互い連携し合い、相乗効果が上がるような教育体制の確立が必須だと思われる。

インターンシップが学生にとって有益であることは確かであるので、センターの役割を変えることを厭わず、恐れず、今後とも試行錯誤を続けながら、課題を克服していく。

《注》

注1

湘北紀要第15号 「学生の企業実務実習(トライアル)」(田中久子著)、湘北紀要第18号 「学生の企業実務実習」(田中久子・長谷川文代共著)に詳述

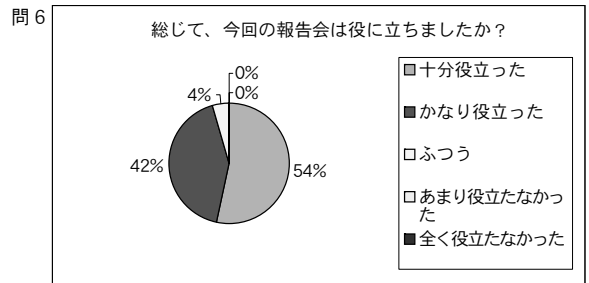
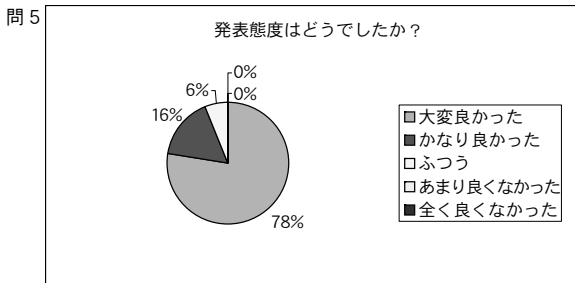
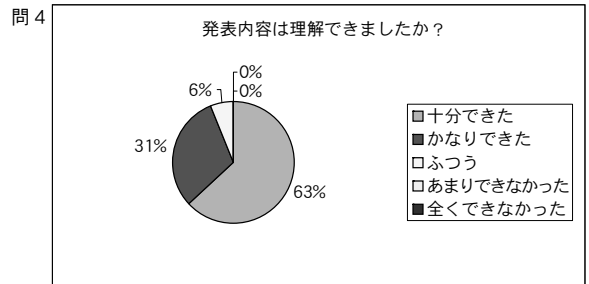
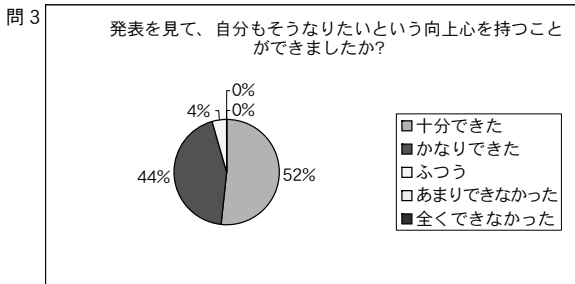
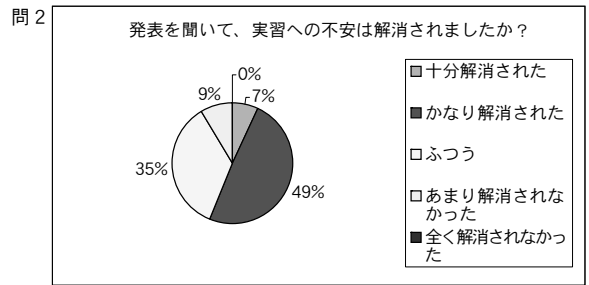
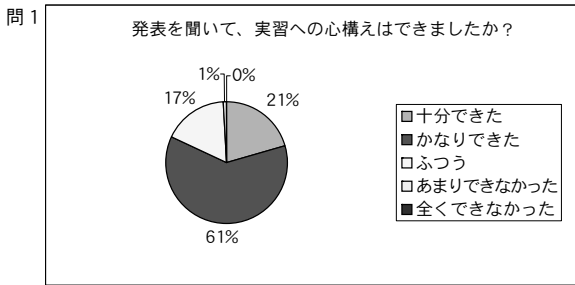
注2

湘北紀要第20号 「ビジネス・インターンシップに関する報告」(長谷川文代著)に詳述

注3

湘北紀要第27号 「『特色ある大学教育支援プログラム』認定後の湘北インターンシップ(学外)に関する報告」(長谷川文代著)に詳述

平成18年度「2年生によるインターンシップ体験報告会」アンケート集計結果



平成18年度「2年生によるインターンシップ体験報告会」アンケート結果（感想）

I 大切だとわかったこと

- * 笑顔と挨拶 (34)
- * コミュニケーション (16)
- * 基本的なこと (10)
- * 目標をたてること (7)
- * 積極性 (6)
- * メモを必ずとること (6)
- * 思いやり (5)
- * 実習先のことを調べておく (3)
- * 分からないことは聞くこと (3)
- * 5分前行動 (3)
- * 敬語 (2)
- * 体力 (2)
- * ほうれんそう
- * 自分から進んで行動する
- * 責任感
- * 疑問を持ち、向上心を高めること

II 今後の希望・決意

- * 将来のためにも、インターンシップに行って成長したい。(7)
- * 先輩達は、話し方も考え方もやはり「先輩」だと改めて実感したので、私もこういう先輩になりたいと思った。(3)
- * みんなインターンシップに対して目標をたて、よい経験をしていてうやましかった。自分も頑張る。(2)
- * 自分の自信につながると思うので、頑張る。(2)
- * 私も有意義に過ごしたいと改めて思った。(2)
- * 1年後、自分も先輩方のように、立派に1年生の前に立ちたいと思うので頑張る。(2)
- * インターンシップに行くまでに、できる限りの知識を身につけておきたい。
- * アルバイトの経験をインターンシップに生かそう。

III 参加した成果

- * 不安が一杯だったが、色々話を聴けてよかった。前向きになれた。やる気と期待で一杯！出席して本当によかったと思った。(20)
- * インターンシップを体験した身近な先輩のアドバイスはとても自分の頭に入り、ためになったので、この報告会を聞いてよかった。(5)
- * 先輩達も皆不安だったことが分かり、安心した。不安が少しは解消された。(5)
- * 話を聴くことによって、インターンシップの目標をたてることができ、改めて頑張ろうと強く思うことができた。(3)
- * 実習先と内定先の職種が異なっている人が多いことに気付き、インターンシップとは、やりたい仕事を見に行くのではなく、「働く」ということを体験しに行くんだ、ということに気付けた。(2)
- * 話を聴いて、私にもメラメラと意欲がわいてきた。(2)
- * インターンシップを有意義なものにできるか、楽しんでやることができるかどうかは自分次第だ、という言葉に共感した。(2)
- * みんな「行ってよかった」「たくさん学べた」と言っていたので、行くのが楽しみだ。(2)
- * 体験談を聞いて、少し内容がつかめた。(2)
- * 自分があまりよく分かっていないことがあることに、改めて気が付いたのでよかった。
- * 自分も実際に体験するんだ！という自覚が出てきた。
- * 先輩達が本音で話をしてくれたので、私もきっと頑張るぞ、というやる気がでてきた。
- * 今日いろいろな話を聞いて、うれしい気持ちも出てきた。
- * 先輩達の話の聞ける機会は中々無いのでよかった。
- * 米澤学長の「バカにされることもある。怒られることもある。だけど、それを恐れちゃいけない。」という言葉が、とても胸に響いた。
- * 社会人として大切なことだけではなく、人として大切なことを教えていただいた。
- * これまで行きたくない気持ちが強くなってきていたが、自分のために社会の勉強をしなくてはならない、「学びに行くんだ」と、強く感じた。

- * これまで、何のために行くのか明確でなかったが、先輩達の話聞いて、大切なことが良く分かり、やる気が更に増えた。
- * 自分が、ちゃんとできるか不安に思っている点が、先輩方の反省点として挙げられていたので、改めてそのような点を気をつけようと感じた。
- * インターンシップが楽しみになってきた。
- * 先輩達の話はすごく力強くで、やる気が出てきた。
- * 話のテンポが大切だということがわかった。早いのも、遅いのも聞き取りにくいということがわかった。
- * インターンシップで学んだことが就職活動で生かせることが分かった。
- * インターンシップに行くための心の準備ができてよかった。
- * どうしよう、という不安感がいっばいになった。後悔の気持ちが少しでてきた。面接に有効、履歴書に書く、という気持ちが入っていて楽しく実習できるのか。
- * どの企業も温かく受け入れてくださることが分かったが、リアルな一面も見えて、逆に緊張の度合いが上がった。

IV 先輩に対する感想

- * みんな緊張しているようではあるが、堂々としていて、自信をもっていることが伝わってきた。私もそうなりたと思った。(11)
- * 先輩の話は的確にまとまっており、丁寧でとても落ち着いているのに驚いた。想像以上だった。(9)
- * 笑顔が大事だと言う先輩達の笑顔がすてきだった。(3)
- * 説明の仕方がとても分かりやすかった。(3)
- * 1年違うだけでこんなに違うものなんだ!と思った。これもインターンシップの効果なのかと思った。(2)
- * みんな目標をしっかり持って実習に臨み、頑張っていたようだ。
- * 話が聞きやすく、内容を自然に吸収することができた。
- * 先輩達の椅子の座り方がきれいで、尊敬した。

V 先輩に対する感謝の気持ち

- * こんな大切な時間を作ってくださいありがとうございました。(2)
- * 今日はとってもためになりました。ありがとうございました。
- * 気付いた点がたくさんあった報告会でした。
- * 貴重なお話を伺うことができて本当によかったです。
- * 私達のためにこんなに遅くまで残ってくださいました先輩方にはとても感謝しています。
- * 先輩達が、私達のことを思って発表してくれたことがとても伝わってきました!
- * 忙しい中、先輩方に、本当、感謝です♡

・上記以外にも、ほとんどの1年生が、「ありがとうございました。」という言葉を書いていた。
この項は、原文のまま。

VI 会の内容・運営に対して

- * 前の方に座っていたが、せっかくのPPが、明るくて見づらかった。(2)
- * 同じ会社の人が出た。全員違う会社(職種)の話がよい。
- * 総合ビジネス学科の人の話をもっと聞きたかった。
- * 実際に行った各フィールドの先輩の話が聞いてみたい。
- * 「販売」の話が多かった。ホテルの話も聞きたかった。
- * フードスペシャリストコースの人の話が聞けず残念だった。
- * 時間制限のためか、PPの内容を飛ばしてしまった先輩がいたが、その部分の話も聞きたかった。
- * 記入シートを書くのに精一杯で、話があまり集中して聞けなかった。シートは無い方がよかった。
- * 日誌などの資料があると、もっとよかったと思う。

以上

注1 : アンケート回答者数は116名。内、感想が記入されていないのは20名のみ

注2 : 同じような内容の感想は、多少言葉遣いを変えてまとめた。

注3 : () 内の数字は、人数